

中陰の意味: 満中陰(四十九日)までの法事は何のためにあるのですか

2009/1/24 初版、2010/1/7 改訂版

Q: 満中陰(四十九日)までの法事は何のためにあるのですか

A.1. 一般的な理解 & テーラバーダ仏教での素朴な営み

人が亡くなると身体がなくなりますので意識だけ(意識身)が遊離して存在する期間に入ります。これを「中有(ちゅうう)」と申します。「意識身」というのは仏教用語ですので一般的には魂()と言った方が馴染み易いと考えられます。

やがて魂は次の世の胚(受精卵等の受け皿)を求めてこれに定着して次の世に誕生するというわけです。これはいわゆる六道輪廻(りくどうりんね)の転生の姿であります。中有の間にある魂は自らはもはや善根功德を積むことができませんので替って遺族ができる限りの供養をしその功德を中有の間にいる肉親の魂に回向しよりよい生まれ変りに手向けるといいます。とりわけ子供が幼くして亡くなるとその子はまだ人生でよい行いを積んでいませんので父母が子供に替って直ちに功德を積みにお寺に詣でます。東南アジアのテーラワーダ仏教(南伝仏教)では今も素朴なその風習が残っています。亡くなったわが子の遺骨をお寺で貰った豆と共に埋葬しやがて芽が出る時が亡くなったわが子が次の世に生まれた印だと捉えるのです。父母が替って功德を積む期間は豆の芽が出るまでの限られた期間になるので父母の姿は必死です。その有様は見る者の胸を打ちます。

註: 浄土真宗では「靈魂」という文字表現を大変嫌うという事実があります。私という実体を認めることを避けようとするからだと考えられます。ではどう表現するかと言うと不自由の極みになりますので、仮にここでは「魂」と表現したことを御断りしておきます。

A.2. 浄土真宗の場合

一方、浄土真宗の中陰では遺族が功德を積んで中有に漂いだした肉親の魂のよりよい生まれ変わりを念じてその功德を回向するという概念はありません。

なぜなら阿弥陀如来のお育てに与った他力の念仏者は亡くなるや否や如来様から賜る(本願力回向)お名号の働きによって六道輪廻の束縛から解き放たれて間髪を入れず浄土往生し即成仏することになるからです。

ここで間違っはいけないのは「成仏」とはお浄土におけるお悟りの身という意味であって死人という意味ではありません。ただ浄土への往生は無生の生(むじょうのしょう)であって六道輪廻のような魂の転生という仕組みではないと言われています。

浄土往生した後はどうかというと還相の菩薩(げんそうのぼさつ)となって私たち今生の苦悩の有情(うじょう)に対して教化の姿を示して働き出してきて下さるのです。

仏事のQ & A「中陰についての質疑応答」

亡者の魂は如来様の本願力によって浄土往生が叶うのであり、浄土往生の後もまた如来様の
本願力によって十方世界(今生の娑婆世界もその一つ)の衆生教化に赴くことになるのです。
かくして、亡くなられた方はお名号と一つになって今生の私達に目覚めよと呼びかけ働きか
けて下さるといわけです。迷いの目にはその姿は見えませんが、南無阿弥陀仏とお名号を
称えるとき確実に如来様の御喚声び声が聞こえて下さいます。肉親の葬儀を機縁として残さ
れた遺族もまたこうして如来様から賜るお名号の御喚び声に目覚め、やがて他力の念仏者と
してお育てに与る最初の大切の期間が中陰だということになります。

ご法事を大切にお勤めしご住職のご法話にも親しみつつ四十九日が満了する満中陰の頃
には懇ろに阿弥陀如来のお慈悲のお育てに与ることによって遺族の悲しみも少しは和らぎ、お
名号の働きに導かれてそれぞれに残された人生の旅路に力強く一步を踏み出すことになる
のであります。合掌。

(あとかき)本Q & Aについては教学伝道研究センターにも問い合わせをご覧戴いております。
センターとして表現にお墨付きを与える仕組みがないので表現自体を差し止めもしませんと
の回答でありました。念のため、末本弘然著「仏事のイロハ」をひもときましたが該当する記載
はありませんでした。よって、これが書き下ろしの回答になります。合掌(玄宥記)。